

ペリー来航後における幕臣勝海舟の上書をめぐって

著者	和田 勤
著者別名	WADA Tsutomu
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	57
ページ	143-161
発行年	2021-03
URL	http://doi.org/10.34428/00012685

ペリー来航後における幕臣勝海舟の上書をめぐって

文学研究科史学専攻博士後期課程2年

和田 勤

一 はじめに

幕末・明治の政治家、勝海舟の出世の糸口となったのは、嘉永六（一八五三）年のペリー来航直後に提出した上書と考えられる。この上書により、海舟は提出後に無役に等しい小普請組から蘭書翻訳勤務を命じられた。上書提出の背景については、嘉永六年六月三日にアメリカのペリーが浦賀へ来航し、日本の開国及び通商を求めてきた。これに対し老中首座の阿部正弘は、諸大名、旗本はじめ一般にまでその対策を諮問した。海舟の上書もこの件に関連して提出されたものと考えられる。しかし、上書は幕閣の他、常陸国水戸藩の前藩主、徳川斉昭宛にも提出されている。上書の概要については、江戸の防衛・人材登用・海軍についてなどを説いている。

当上書については多数の先行研究が存在する。その中でも、近年注目すべきものとしては年代順に松浦玲氏、小池喜明氏、片桐一男氏、金澤裕之氏の研究が挙げられる¹。なお詳細については、上書自体が三種類存在するため、後に註記する。

三種類の上書の一通は、嘉永六年七月に徳川斉昭宛に提出されており、この上書を第一上書と呼称する。もう一通は第一上書と内容がほぼ同種の上書であり、「存寄申上候書付」の名称で存在する²。残りの一通は第一上書の提出後、幕閣からの要請に応じ、海舟は同月の嘉永六年七月に再度上書を提出した。この上書を第二上書と呼称する³。この中の第一上書には幾つかの写本及び草稿が存在する。上書自体の内容に対しては、前出の先行研究で考察が行われている⁴が、これら写本等について比較検討を行った考察は管見の限り見当たらない。

本論考では、第一上書の各種写本等についての比較検討を行い、写本はいずれの系統に分かれているか、内容に決定的な差異は存在するのかを考察する。合わせて第一上書以外の二通の上書との関連、及び上書に関連する史料・人物についても考察する。

二 三種類の上書

(1) 第一上書

第一上書が徳川斉昭に提出された根拠については、改造社版『海舟全集』に収録された同上書の題名には「(一) 水府老公えの上書」⁵とある。松浦玲氏は海舟が後援者である伊勢国飯野郡射和村出身の商人、竹口信義へ嘉永六年八月一日付で出した書簡⁶の中で「水府公江之上書」を一緒に贈るとあり、それが同上書の写本であると指摘している⁷。なお、当書簡には他にも海舟の論説「蟬行私言」が同時に添付されている。斉昭は嘉永六年七月に幕政参与となっており、この人事が同上書の提出と関係しているとされる⁸。

第一上書の写本及び草稿などは、管見の限り九種類の存在を確認している。解説が煩雑になるため、参考として巻末にこの九種類の上書の系統を、「表 勝海舟のペリー来航後上書 第一上書 系統図」として表記した。この表を基に解説する。

i 「鈴木大雑集」収録「愚衷申上候書付」

水戸藩士であり、蘭学を修め情報収集を行っていた鈴木大が編纂した「鈴木大雑集」に収録されたものである。

これは後に『幕末外国関係文書』に収録された⁹。更に『幕末外国関係文書』から講談社版『勝海舟全集』に収録された¹⁰。

なお、『幕末外国関係文書』の該当史料刊行（明治四三・一九一〇年）の後に『鈴木大雑集』が刊本化（大正七～八・一九一八～一九一九年）されている¹¹。

ii 「如是我聞」に収録か

『幕末外国関係文書』の編者が「鈴木大雑集」を収録した際、「如是我聞」という史料を傍註に使用した¹²。その後この上書が『幕末外国関係文書』から講談社版『勝海舟全集』に収録された際には、「如是我聞」の傍註は収録されなかった。なお「如是我聞」の詳細は不明である。

iii 鷹見泉石旧蔵、現古河歴史博物館所蔵「愚存申上候書付」

下総国古河藩家老で蘭学者でもあった、鷹見泉石が所蔵していたものである。これは古河市指定文化財の鷹見家歴史資料の一部として、古河歴史博物館所蔵となっている。刊本としては片桐一男氏の『勝海舟の蘭学と海軍伝習』で全体の写真版が掲載され、その全文が翻刻されている¹³。

iv 東京大学史料編纂所蔵「斉彬公史料」収録「勝麟太郎勝頼上書」（「愚衷申上候書付」）

東京大学史料編纂所が所蔵する「島津家本」中の「斉彬公史料」に、「勝麟太郎勝頼上書」の名前で掲載された。なお、史料本文中の題は「愚衷申上候書付」となっている。これは『鹿児島県史料 斉彬公史料』として刊本となっている¹⁴。

v 東京大学史料編纂所蔵、水戸徳川家旧蔵「てきばんいぎ遯蜚彙議」収録「愚衷申上候書付」

徳川齊昭が集めたペリー再来航対策の上申書集である「邊蛮彙議」に収録された。正確には「邊蛮彙議拾遺 四」に収録されている。「邊蛮彙議」は元水戸徳川家の第一三代当主、徳川圀順侯爵が所蔵していた原本を、東京帝国大学史料編纂所のチームが大正九（一九二〇）年から五年間かけて筆写したものという¹⁵。現在東京大学史料編纂所に写本が存在し、同所のデータベース検索から閲覧可¹⁶である。

vi 足利学校所蔵「愚衷申上候書付」

海舟自筆の写本である。江戸東京博物館で平成一一（一九九九）年に開催された「没後一〇〇年勝海舟展」で複製が展示され、図録である東京都江戸東京博物館編『没後一〇〇年勝海舟展』に写真版の一部が掲載された¹⁷。

vii 改造社版『海舟全集』収録「愚衷申上候書附」

史料の出典は明記されていない形で、改造社版『海舟全集』第九巻に収録された¹⁸。これは勁草書房版『勝海舟全集』第一四巻に読み下しの形で収録された¹⁹。

viii 竹口信義旧蔵、現竹川家所蔵の海舟上書

松浦玲氏によると海舟自筆の写本とあり、竹口信義に贈ったものが竹口の兄で海舟の後援者でもある伊勢射和の商人竹川竹斎に回覧され、子孫の竹川家に現存する²⁰。

ix 大田区立勝海舟記念館所蔵「海舟存寄書草案」（「愚存申上候書付」）

大田区立勝海舟記念館²¹から刊行された同記念館の図録『勝海舟 勝海舟記念館図録』には、同館所蔵の史料「海舟存寄書草案」が掲載されている。「海舟存寄書草案」には、第一上書の草稿が収録されており、第一上書自体の題は「愚存申上候書付」となっている。図録には同草稿の写真及び釈文の一部が掲載され、「作成段階における自筆草稿」とある²²。そのため諸種の写本と比較すると内容の異同が多い。

これまでに入手することのできたものの中で、活字化されていないと考えられる、あるいは新出史料である v 「愚衷申上候書付」の全文と、vi 「愚衷申上候書付」・ ix 「愚存申上候書付」の一部を以下に掲載する（なお傍線及び読点は和田が付けたものである）。

v 「愚衷申上候書付」

愚衷申上候書付

此度米利輪之使節船渡来仕、滞船中、内海深く乗入、測量浅深等探り候義は、誠に以て案外之事にて、其上若手違ヒ等御座候て、万々一不測之変も御座候ハ、兼々厚く御世話被遊置候房相之御固等、右様之節に至り候ては、何之御要害にも不相成、空敷勇卒切齒仕候て、海岸を守り居候より外致方も無御座候義と奉存候、甚以て奉恐入候へとも、之は本邦之兵制銃法共に古轍に泥ミ、其上追々安きに狃ひ候て、武備自から廢馳仕、実用を失ひ候より起り候事にも可有御座哉、故に彼其恐も少なきを覬覦仕候て、輕蔑之情体を相顕し候事と奉存候、猶又此上猖獗之諸蛮とも承り伝へ、右様之義年々御座

候様相成候ては、御国威之より衰弱仕、其上大小名共に奔命に勞れ、万民勞役を憚り、果は怨聲道路に載候様相成候ては、終には天下之御大事とも相成可申哉も難計、甚以奉恐入候義ニ御座候、凡當時之御急務肝要之御所置は、先軍政之御變通并沢將調練等之三要に止まり可申哉と奉存候、其上江戸海江堅固之御台場御建造并御旗本御世話被遊候御事、尤御急事と奉存候、彼邦之軍艦は堅牢金城之如く、其上周旋自由を得候もの、由に候間、富津觀音崎猿島等如何程御世話被遊候とも、場広之所、中々以て此所にて防き留め、江戸海江乗入候を止め候事は難事之上の難事と奉存候、若又右之場所にて嚴敷打合候ハ、之に応し候ほと軍艦一二艘も止め置き、火輪船などを以て暫時に内海江乗入、江戸市中江向ひ焼玉等打掛候ハ、緩急之御備相立難く、事機に後れ、臍を嚙候も及ひ難き義も可有御座哉と奉存候、故に江戸之御固め嚴重に御備被遊候事、当今之御急務此上も御座なく候御義と奉存候、彼邦にて専ら海岸に設置候銃台には十八斤以上之大銃并暴母加農と唱候大銃を採用仕候由、乍然唯々銃種多きのみにて其製作法度に不叶、其上銃台之位置宜敷を得不申候ては、實地に望ミ候て、寸功も無御座、却て味方ニ損害を生し候由、及承候、江戸海之地勢にて申上候得は、先大森村羽田之出洲、品川之洲先并佃島之出洲等築出し、此处江は七十挺備御台場其外深川之地先、芝因州之下屋敷并浜御庭先等へは、十挺或は廿挺備之御台場御建造被遊、之より彼此相応之十字体に放發仕候ハ、ケ成江戸にて嚴重に可有御座候哉と奉存候、此外場所に応し候て嚴重之御台場は無御座候とも、暴母避肝并胸壁など設け置候ハ、不調練之多人數よりは遙に相勝れ可申と奉存候、一体外寇防禦には軍艦無御座候ては全備不仕候義には御座候へとも、唯今之所にては、軍艦御座候とも不練熟故、急に御用立申間敷と奉存候、先差当江戸之御固め嚴重に御世話被遊置、其上追々軍艦其他之御世話被遊候とも、遅かる間敷御義と奉存候、譬万々一戦争に及候て、内地を離れ候孤島など一兩所奪ひとられ候とも、軍艦御製作に相成、兵制御變通之御趣意相立候ハ、暫時ニ取戻し、其上彼か巢穴を攻伐仕候も相成難き義とも不奉存候、凡百般之事一時に十全仕候様なる義は且て有御座間敷候間、緩急に応し御世話被遊候ハ、難有御儀と奉存候

私底若輩をも不顧、国家之御大節之義とも奉申上候ハ、誠に以て死罪之至に御座候得共、数代莫太之御国恩に浴し居候身分、誠に深く憂懼仕候義府、不顧恐愚衷之趣、謹而奉申上候、以上

小普請組

松平美作守支配

勝 麟太郎

丑七月

vi 「愚衷申上候書付」²³

愚衷申上候書付

一此度米利輪之使節船渡来仕、滞船中、内海深く乗入、測量浅深等探り候義は、誠に以て案外之事にて、其上若手違ひ等御座候て、万々一不測之變も御座候ハ、兼々厚く御世話被遊置候房相之御固メ等も、右様之節ニ至り候ては、何之御要害にも不相成、勇卒空敷切齒仕候て、海岸を守り居候より外致方無御座候御義と奉存候、甚以て奉恐入候へ共、之は本邦之兵制銃法共に古轍に泥ミ、其上追々安きに狃ひ候て、武備自から廢弛仕、実用を失ひ候より起り候事にも可有御座哉、故に彼其恐れ少きを覬覦仕候て、輕蔑之情体を相顯し候事と奉存候、猶又此上猾獮之諸蛮夷と共に承り伝へ、右様之義年々御座候様相成、是は御国威之より衰弱仕、其上大小名共に奔命に勞れ、万民（和田註、これ以降は掲載されていない）

ix 「愚存申上候書付」²⁴

○愚存申上候書付

一此度米利堅之使節船渡来仕、滞船中、内海深く乗入、測量浅深等探り候義は、誠に案外之事にて、其上若手違等御座候て、万々一不測之變も御座候ハ、兼々厚く御世話遊被置候房相之御固も、何之御要害にも不相成、警衛之勇卒空敷切齒仕候て、海岸を守り居候より外致方無御座候義と奉存候、甚奉恐入候へとも、之は本邦之銃法兵制共に古轍に泥ミ、其上追々安きに狃ひ候て、武備自から廢弛仕、実用を失候より起候事にも可有御座哉、故に彼其恐も少を覬覦仕、輕蔑之情体を相顯事と奉存候、此上猾獮之諸蛮夷とも承り伝、右

（中略）

江戸海之地勢にて申上候へは、先大森村羽田之出洲、品川之洲先并佃島之出洲等築出、此処へは七十挺備御台場其外深川之地先、芝因幡守下屋敷并濱御庭先等へは、十或は廿挺之御台場御築造遊され、之より彼此相応十字射に放発仕候ハ、可也江戸ハ嚴重ニ可有御座候哉と奉存候、其他は場所に依候て嚴重之御台場ハ無御座候とも、暴母避床并胸壁など設け置候ハ、不調練之多人数よりは遙に相勝可申と奉存候、一体海寇防禦には軍艦無御座候ては全備仕らず候義ニは御座候へ共、唯今之所にては、軍艦御座候共不練熟ゆへ、急ニ御用立申間敷と奉存候、先差当江戸之御固め嚴重に御世話遊され置、其上追々軍艦

（後略）

九種類の上書を比較してみた結果、文章の大意についての決定的な異同はないといえる。目立つのは、i・iv・vii・ixでは「十字射」とある箇所が、iiiでは「十字鉢」、vでは「十字体」と記されている。「十字鉢」と「十字体」を比較すると、台場が関係することから「十字射」が正しいと考えられる。またvなどでは「内地」及び「一兩所」などと表記される箇所が、iv・viiでは「内海」「兩三所」とある。これより、iv・viiの二つは同一の史料を基にしている可能性がある。しかし、ivの海舟の署名にはviiiと違い、通称の「勝麟太郎」の他に

も割注で「義邦」と実名が加えられている。なお実名が加えられているのはivのみである。

「内地」（意味としては「本土、内陸」）と「内海」（「入り江、湾」）は、双方とも文章の意味は通じる。「内海」の文字自体が上書で二度既出のため、書写の際に「内地」の文字も「内海」と記述してしまった、という可能性がある。他にはviiのみ日付に「嘉永六年七月十二日」と日まで入っている。しかし、この日付の裏付けになるものは現在のところみつかっておらず、講談社版『勝海舟全集』でも松浦玲氏により日付の信憑性の低さが指摘されている²⁵。

（２）「存寄申上候書付」

第一上書と内容がほぼ同種の上書である。しかし文章自体は異なっている。第一上書になる「存寄申上候書付」にはある記述の一例として、「去ル三日」とペリー来航日の六月三日が記されている。この記述は、「存寄申上候書付」が六月に提出されたことを裏付けるものといえる。この上書には六月二九日と日付があり、七月提出の第一上書よりも先に提出された上書となる。なお、提出先は幕閣との指摘がなされている²⁶。

「存寄申上候書付」は『幕末外国関係文書』によると「堀口貞明筆記」を出典としている。堀口貞明は上野国の名主の出であり、佐久間象山と交流があった人物である²⁷。象山と海舟は師弟関係であり、更に象山の妻が海舟の妹順という義兄弟関係にある。そのため、象山を介して堀口へ上書が伝わった可能性が推測されるが、伝来の詳細は不明である。

（３）第二上書

第一上書提出後に幕閣からの要請に応じて再度提出されたのが第二上書である。改造社版『海舟全集』²⁸に収録された同上書の題名には「参政但州侯之下問に答へし意見書」とある。「参政但州侯」とは若年寄の遠藤但馬守胤統（近江三上藩主）²⁹のことであり、幕閣から海舟に再諮問する窓口となったのが遠藤であったとされる³⁰。

同上書は第一上書と同様に「鈴木大雑集」に採録され、『幕末外国関係文書』に収録された後、講談社版『勝海舟全集』に収録された。なお勁草書房版『勝海舟全集』にも収録されているが、出典は明記されていない。第一上書と同様に、改造社版『海舟全集』が元と考えられる。なお『勝海舟 勝海舟記念館図録』に掲載された「海舟存寄書草案」の、第一上書の草稿が掲載された前頁には第二上書の末尾が掲載されている。これは上書の内容の詳細さ及びその重要性から、この順序にしたと考えられる。

第二上書の写本は、東京大学史料編纂所蔵「斉彬公史料」の「勝麟太郎義邦旧名上書」に第一上書（iv）と一括りにされて記載されている³¹。また、江戸で書肆を営んだ藤岡屋由蔵が当時の情報を記録した『藤岡屋日記』にも掲載がある。こちらは、「第四十五 嘉永六癸丑年 諸家上書 全」の項目中の「上書之大略」と、「第四十七 安政元三月十五日改元嘉永七甲

寅四月分 海防全書 下」の項目中の「七月五日」に、第二上書の綱文が掲載されている³²。なお、これらとはほぼ同様のものが、国立国会図書館憲政資料室の「三条家文書」、資料番号二一六、「諸家建議」に収録されている³³。

第二上書も第一上書同様に、上書自体の内容に対して先行研究で考察が行われている³⁴が、上書自体は五項目の論題によって構成されている。この五項目は、「第一 御人選之儀厚被遊御世話、下情上に達し候様可被遊候事」「第二 海国兵備之要、軍艦無御座候ては難叶候事」「第三 天下之都府には嚴重之御備有度候事」「第四 御旗本之面々厚く御世話被遊、兵制御改正并教練学校御建造之事」「第五 人工硝石御世話并武具製作之事」と記されている³⁵。内容から要約して説明すると、順に①人材登用、②海軍と交易、③都府、特に江戸の防衛、④幕臣の登用、⑤武器及び硝石の製造に関係する幕臣への職の斡旋、と表記できる。

海舟は①の中で、人材に「^(ママ)闕論（討論）考究」³⁶させよと説いている。海舟は明治期の回顧録「解難録」において、戊辰戦争の新政府軍の東下に対して旧幕府内で出た「衆議を以て処置を決せむ」との意見に対し「予、出席一日にして告て曰く、『諸君、宜敷衆議を尽すべし。予は為すべく施すべき儀山積す、空敷衆議を聞く不能なり』と。是より欠席、衆議に任す。此後、衆議を以て何事の成りしを見ず、唯空敷時日を消するの場たり」³⁷と、衆議を軽視する態度を取っている。海舟が出世するにつれて意見が変わったとも見られるが、発言の際に置かれた立場が大きく違う。ペリー来航の際に海舟は小普請組であり、一方戊辰戦争時の海舟は多くの抗戦派をおさえて、恭順派として大久保一翁・高橋泥舟・山岡鉄舟らと共に江戸開城を成功させている³⁸。立場が変化すれば意見も変化する例といえる。

②の中では清国や朝鮮との交易を構想している。海舟は後に対馬藩士大島友之允に対し、日本・朝鮮・中国の三国連合論を唱えているが、その嚆矢がこの交易論であったと考えられる³⁹。

⑤の中では火薬の製造が関係することもあり、玉薬同心についての記述がある。海舟の家、勝家が徳川家に仕えたのは、天正三（一五七五）年に海舟の先祖である時直が御鉄砲玉薬組として召し抱えられたのが最初である⁴⁰。自家の起源といえる玉薬同心を上書に出すことは、海舟が意識して記述したと推測される。また第二上書は、④と⑤が幕臣の職の斡旋について言及している。困窮した幕臣を積極的に使役することによる経済的救済を唱えたのは、一生を小普請組で過ごした父小吉の存在が大きく影響していると推測される。

第二上書を切っ掛けに海舟は蘭諸翻訳勤務に就き、出世の発端となった。同時にこの上書に海軍関係の内容が記述されていたことから、海舟は最終的には海軍の父の一人と称されるに至った。そして幕臣の職の斡旋については、海舟は幕府滅亡後の明治期に実行することになった。この様に、第二上書は結果的に海舟の人生の方向性を決定づける物になった。

次いで、第二上書を第一上書と比較検討する。第一上書を要約して説明すると、軍制の改革・将を択ぶ・兵の調練を三つの大要として、その上で江戸湾内に堅固の台場を築き、旗本

を世話してその扱いを向上させることが急務と説いている。また軍艦は必要ではあるが、直ぐに使いこなすことは困難なため、まずは江戸の防備を固めてからでも軍艦については遅くはないと説く。

第一上書と第二上書の関係は、前者についての詳細な説明を後者で五項目の論題にわけて実施するという面が強い。しかし、両者の大きな違いは、第二上書にのみ交易論が存在することである。これは、第一上書は江戸の防衛などの早急に行うことが必要な内容が中心である。一方第二上書は第一上書以上に長期的視野に立った内容が含まれるからと考えられる。海舟の海軍論の大きな特徴である、国内海運や海外交易で軍艦の費用をまかなうとの論は、海舟の後援者の竹川竹斎も「護国論」「護国後論」などの著書にて唱えている⁴¹。しかし、海舟にとって海軍と交易を連携させて運用する方法は、後の日本・朝鮮・中国の三国連合論に派生していくと考えられる。

三 上書に関連する史料及び人物

(1) 「蟬行私言」

海舟が竹口信義に第一上書と共に送った海舟の論説「蟬行私言」⁴²は、片桐一男氏により第一上書に「結実していった、とみなされる」と評され⁴³、実際にその内容は第一上書に類似している⁴⁴。

ペリー来航の情報漏洩については、「「ペリー来航予告情報」は、浦賀奉行所与力小笠原甫三郎より佐久間象山、そしてその弟子吉田松陰にも、もたらされていたと推測される」と、佐久間象山までは漏洩していたとの研究がある⁴⁵。

象山と海舟は前出の通り師弟関係である上に義兄弟関係にある。これを踏まえると両者間で情報が渡ったことは十分に考えられるが、嘉永六年ペリー来航前後の両者間の書簡が現在見つかっておらず、史料による確認には到っていない。

(2) 海舟人脈の重要人物高橋栄格

ペリー来航後の海舟の上書が数種残ったのはそれぞれに経緯がある。この中で、鷹見泉石の元にも上書が残った経緯については、高橋栄格という人物の関与が考えられる。高橋栄格は海舟と鷹見との関係を取り持った人物の可能性がある。

高橋栄格は、信濃松代藩の絵師三村晴山⁴⁶と共に無役であった海舟と薩摩藩世子であった島津斉彬を結びつけた人物でもある。『史談会速記録』⁴⁷第一六二輯の附録「島津家事蹟調査訪問録」には、明治二一（一八八八）六月六日の海舟の談話が記載されている。談話によると、海舟は小普請組時代に筆耕により生活費を稼いでいた。その中で三村を仲介者とする依頼を受けたが、筆耕料が相場よりも遙かに高額であった。この依頼人が、実は斉彬であっ

た。斉彬は、三村と高橋に機密の用を務めさせていた。三村と高橋は、海舟が蘭学を学んでいることを知っていて、二人から斉彬へ海舟の存在が伝えられた様である。こうした縁で、海舟は斉彬の知遇を得た、という⁴⁸。

しかし、海舟と高橋との詳しい交流について論じたものは、管見の限り見当たらない。高橋は海舟の後年談話にも登場する人物である。『史談会速記録』には、高橋栄格と海舟の関係について第四八輯・第一六二輯・第三一四輯に記載がある。

その中でも第四八輯では、明治二九（一八九六）年九月一二日の寺師宗徳（史談会を結成した薩摩の修史家、市来四郎の甥）の談話に続いて、寺師が海舟から聞いた談話が掲載されている。

齊彬公在世ノ時愛顧ヲ受ケシハ奥坊主高橋栄格ナリ当時半井善朴ト云フ坊主アリ兩人俱ニ年功者ニテ勢力アリシ半井ハ剣術高橋ハ砲術ヲ以テ名ヲ称セラル高橋ハ上野池ノ端ニ住ミシカ奢侈ヲ極メタリ

高橋は剃髪・法服で江戸城内の雑役に従った茶坊主の中の、将軍が日常使用する衣類・道具などの身の回り品の保管や出納を司る奥坊主とされ、斉彬から愛顧を受け、その職に長くあり、政治的に影響力があり、砲術が巧みで上野池の端に住んで贅沢を極めていたとある。この後には、海舟を島津斉彬に引き合わせたのは高橋であるとの海舟の談話が続く。なお、談話には他の坊主として「半井善朴」という人物が登場する。この「半井善朴」と共に、高橋栄格を『江戸幕府役職武鑑編年集成』⁴⁹で確認したところ、天保八（一八三七）年の「天保武鑑」に高橋は「表御坊主衆」として在籍している。また、「表御坊主組頭」に「平井善朴」という人物の存在が確認され、「半井善朴」は「平井善朴」のことであると考えられる。他には天保九（一八三八）年の「大成武鑑」、そして安政二（一八五五）年の「安政武鑑」では、高橋は同様に「表御坊主衆」として、平井は「表御坊主組頭格」として記録がある⁵⁰。即ち、高橋と平井は、奥坊主ではなく、城内の表座敷を管理して大名や諸役人に茶や弁当を給仕する表坊主だったことになる。

高橋栄格が幕府の表坊主であったことを武鑑から確認した。次に『鷹見泉石日記』から高橋栄格と海舟の記述を確認する。すると「嘉永七年寅旅日記」⁵¹三月四日条には「一、栄格より手紙、書拔并隣（和田注ママ）太郎様御手紙来」とあり、同月五日条に高橋宛海舟書簡の内容が記録されている。

一、加州大聖寺表之人、西洋流大炮、御懇望之趣、委細承知仕候。未熟之私、力之及候丈は御伝へ可申候。七日稽古ニ御出候間、何日ニても宜、長日御出可被成候。

一、鷹見氏、尊館へ御出之由、此節、アメリカ之貢物中、エレキトル○デン○ガラフ一書、近時発明之品、此品、種々奇功御坐候由、既ニ英吉利より仏郎西へ海上を隔れて暫時合図ヲ通し候便利も出来候由、又和蘭えも右器、此節仕懸候由、承居候。

一、天台之損候節、取繕候装造便法はラストバウエーギングと申、尚中ニ相見申候。御

内々御遠行之由、定て異艦御一覧と奉存候。取急キ貴答、大乱筆、海容可被下候。以上。

栄格様

麟太郎

「鷹見氏、尊館へ御出之由」と、鷹見が高橋の居館を訪ねたことを海舟が知っていることから、彼ら三人が嘉永七（一八五四）年のこの時点までには共通の知人であったことが理解できる。また書簡には西洋流大砲の話題も見受けられる。高橋は砲術が巧みであることが、西洋砲術家でもあった海舟との共通の話題になったと考えられる。なお、「エレキトル○デン○ガラフー」とはエレキテレーセテレグラフ、すなわち電信機と考えられる⁵²。他にも加賀の大聖寺についての記述があるが、大聖寺藩は加賀金沢藩の支藩である。『加賀藩史料』に収録された「松台遺墨」によると、安政二（一八五五）年五月八日に金沢藩主の前田斉泰の命により品川沖の薩摩藩の軍艦昇平丸を見分に行った家臣と共に、同道した「御城方坊主」として平井善朴と高橋栄格の名前が出て来る⁵³。これより、高橋は金沢藩と大聖寺藩の双方と関係を持っており、高橋・金沢藩・大聖寺藩の間に繋がりがあった可能性が考えられる。

同月七日条にも「栄格へ参候処留守、パン式つ差置、麟太郎様より之御書面戻」と高橋と海舟が登場する箇所がある。

表坊主はその職制上江戸城内の事柄には精通しており、特に高橋は「奢侈ヲ極メタリ」とされる存在であった。この立場から、島津斉彬と海舟との関係を取り持ったのと同様に、鷹見泉石と海舟との関係を取り持ったのは高橋であると考えられる。

高橋栄格については伊東多三郎「権力と茶坊主」⁵⁴によれば、末尾で「譜代大名の筆頭、三十五万石の彦根藩から助力を請われた茶坊主の実力は幕府権力機構の鱗片であろう」と結論づける。この様な高橋の実績は、海舟の談話の証左となるものといえる。

四 おわりに

本論考の結果は、以下の通りである。

- ・海舟はペリー来航後に三種の上書を提出した。その内の一種である第一上書の各種写本の比較検討を行ったところ、九種類の系統が確認された。

- ・第一上書には海舟自筆の写本が複数存在することと、各種写本の系統図を作成した結果、各種の写本は一つの原本から派生したのではなく、海舟が幾つか書いた上書の写本がそれぞれ写された、という伝来の形になったと考えられる。

- ・第一上書の各種写本の内容を比較検討した結果、文章の大意についての決定的な異同はなかった。

- ・第一上書は、厳密には徳川斉昭に提出したのであるから、「邊蛮彙議」が最も提出物に

近いと考えられる。しかし、「邊蛮彙議」は水戸藩が写本で保存し、更にそれを史料編纂所が再度筆写して保存している。そのためか「十字射」とあるべきところを「十字鉢」と記述しているなどの箇所があり、他の写本との照合による分析が必要である。

・第一上書の次に提出された第二上書は、その後の海舟の行動指針といえるものとなり、出世の発端ともなった。結果的に第二上書は海舟の人生の方向性を決定づける物になった。

・第一上書の写本を持つ鷹見泉石と海舟の両者を結びつけたのは、海舟と島津斉彬を結びつけた幕府表坊主の高橋栄格が同様に行ったと考えられる。表坊主はその職制上江戸城内の事柄には精通しており、特に高橋は「奢侈ヲ極メタリ」とされる存在であった。高橋の様な茶坊主は、人脈作りの際に重要な役割を担う存在であったと考えられる。

今後の課題としては、上書という存在そのものの歴史的意義を考察したい。海舟は、ペリー来航後上書の内容が認められて、蘭書翻訳勤務に任命された。また、海軍の建設を建白したところ、実際に海軍創設に関わることとなった。この様に、上書という存在は大きな意味を有している。海舟は多数の上書を残しており、それらが歴史にどう影響を与えたかは解明し切れてはいない。上書の更なる考察は必要不可欠なものといえる。

¹ 松浦玲『勝海舟』筑摩書房、二〇一〇年。小池喜明『幕末の武士道「開国」に問う』敬文舎、二〇一五年（以下『幕末の武士道』）。片桐一男『勝海舟の蘭学と海軍伝習』勉誠出版、二〇一六年。金澤裕之『幕府海軍の興亡 幕末期における日本の海軍建設』慶應義塾大学出版会、二〇一七年（以下『幕府海軍の興亡』）。

² 東京大学史料編纂所編『大日本古文書 幕末外国関係文書』一、東京大学出版会、一九一〇年、一九七二年覆刻、七二八～七三〇頁（以下、『幕末外国関係文書』）に収録されている。

³ 第一上書及び第二上書の呼称は、前掲小池『幕末の武士道』による呼称を参考にした。

⁴ 前掲松浦『勝海舟』は、「軍政の変革と、将を択ぶと、調練との三つを急務」とする。また「江戸湾内に堅固の砲台を築」き、「まず砲台、軍艦は追々」とする（六二頁）。小池『幕末の武士道』は、「「軍政之御変通」（軍制改革）、「択将」（将たる者を撰ぶこと）、調練（軍事訓練）の「三大要（件）」に、「堅固之御台場御取建（建造）」「御旗本御世話」（利用と待遇改善）をあわせた計五項目を、より具体的に敷衍したものが「第二上書」とする（二三八頁）。前掲片桐『勝海舟の蘭学と海軍伝習』は、上書全体が五段にわたって具申していることを指摘し、「「軍艦」の「製作」と「兵制」の「変通（＝改革）」を重要視し、「最終的な結論・主張としては、まず江戸の固め」を行い、「追て軍艦その他の整備」を実行するべきであるとする（二七～二九頁）。前掲金澤『幕府海軍の興亡』は、「海軍力の建設には時間がかかることを指摘し、当面取り得る対策として江戸内海への台場築造を提案している」とする（五一頁）。

⁵ 改造社版『海舟全集』九、四三一頁。なお、海舟の全集は以下の三種がある。

・海舟全集刊行会編『海舟全集』改造社、一九二七～一九二九年（以下、改造社版『海舟全集』）。

・勝部真長、松本三之介、大口勇次郎編『勝海舟全集』勁草書房、一九七二～一九八二年（以下、勁草書房版『勝海舟全集』）。

・勝海舟全集刊行会編『勝海舟全集』講談社、一九七二～一九九四年（以下、講談社版『勝海舟全集』）。

⁶ 前掲講談社版『勝海舟全集』二、一一頁。

⁷ 松浦『勝海舟』、六〇～六一頁。

⁸ 松浦『勝海舟』、六一頁。

⁹ 前掲『幕末外国関係文書』一、七二四～七二七頁。

¹⁰ 講談社版『勝海舟全集』二、二五五～二五六頁。

¹¹ 日本史籍協会編『鈴木大雑集』一～五、日本史籍協会、一九一八～一九一九年。海舟の該当上書は五、三三八～三四一頁。

¹² 一例として、『幕末外国関係文書』収録の第一上書に「取建」とある横に、「(建造^{一六})」と記されている。「取建」は「鈴木大雑集」と合致するため、「(建造^{一六})」が「如是我聞」からの引用と考えられる。

¹³ 片桐『勝海舟の蘭学と海軍伝習』二三～二九頁。

¹⁴ 鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 斉彬公史料』鹿児島県、一九八一～一九八四年（以降『斉彬公史料』）。海舟の上書は第一巻六一四～六一六頁に記載されている。

¹⁵ 今津浩一「ペリー来航対策の大名上申書—徳川斉昭編「邊蛮彙議」による分析—」横須賀開国史研究会編『開国史研究』一九、横須賀市、二〇一九年。なお水戸徳川家の史料を引き継いだ徳川ミュージアムによると、現在「邊蛮彙議」の原本は存在しないという。

¹⁶ https://cloimg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/view/idata/T16/II_222ni_/145-B/4/0860?m=limit&n=100 二〇一九年一〇月九日閲覧。

¹⁷ 東京都江戸東京博物館編『勝海舟展 没後一〇〇年』東京都江戸東京博物館、一九九九年、一八頁。

¹⁸ 前掲改造社版『海舟全集』九、四三一～四三二頁。

¹⁹ 前掲勁草書房版『勝海舟全集』は一二・一四巻のみ江藤淳、勝部真長編の旧版が存在する。旧版一四に収録された上書の題名が「一 水府老公への上書」と、改造社版『海舟全集』のものと同じである。なお、新版一四の収録ではiv 史跡足利学校蔵「愚衷申上候書付」を校訂に使用したとの解説がある。

²⁰ 松浦『勝海舟』、六一頁にて、その存在について言及されている。しかし史料の内容など、詳細については記述されていない。なお、コロナ禍の影響にて未だ実物の閲覧が叶わない状態ではあ

るが、いずれ閲覧予定である。

²¹ 海舟とその妻民は、海舟の別邸がかつて存在した洗足池の畔に墓がある。その墓所の近接地に初の勝海舟の記念館である大田区立勝海舟記念館が、令和元（二〇一九）年九月七日に開館した。

²² 大田区立勝海舟記念館編『勝海舟 勝海舟記念館図録』大田区立勝海舟記念館、二〇一九年、三一頁。

²³ 前掲『没後一〇〇年勝海舟展』より、図録の写真版から釈文をとった。図録掲載時から全体の一部しか掲載されていない。

²⁴ 史料の一部分のみが、前掲『勝海舟 勝海舟記念館図録』に掲載されている。

²⁵ 講談社版『勝海舟全集』二、六三八頁。

²⁶ 松浦『勝海舟』、六一頁。

²⁷ 阿部征寛「堀口貞明の思想と行動」横浜開港資料館編『横浜開港資料館紀要』八、一九九〇年、一～一八頁。

²⁸ 改造社版『海舟全集』九、四三二～四三五頁。

²⁹ 藤田英昭「嘉永・安政期における徳川慶勝の人脈と政治動向」竹内誠、徳川義崇編『金鯢叢書 史学美術史論文集第四四輯』徳川黎明会、二〇一七年では、遠藤胤統とその親戚の徳川慶勝との政治的な関係について言及されている。

³⁰ 松浦『勝海舟』、六二頁。

³¹ 刊本では前掲『斉彬公史料』第一卷六一六～六一九頁に記載されている。

³² 須藤由蔵著、鈴木棠三・小池章太郎編『藤岡屋日記』（近世庶民生活史料）、三一書房、一九八七～一九九五年。該当史料は、「第四十五 嘉永六癸丑年 諸家上書 全」収録のものは第五卷五七九頁に、「第四十七 安政元三月十五日改元嘉永七甲寅四月 海防全書 下」収録のものは第六卷二五頁に収録されている。それぞれ筆写に問題があったためか、内容は全く同じではない。

両者を収録している史料群がどのような史料を収録しているかを確認すると、前者は嘉永七年三月の文章が時期的に最後のものであり、タイトルには「嘉永六年」とあるものの当史料集は嘉永七年以降に作成されたものであると考えられる。また収録上書は諸大名のものが中心である。幕臣は個人のものでは江川英龍の上書が全文掲載されている。一方後者は時系列で安政元（一八五四）年の四月四日から一二月二九日までの海防に関する史料を、身分は諸大名から町人まで多岐にわたる人物のものを収録している。また、海舟の上書は七月五日の箇所収録されているが、その裏付けになるものは現在のところ見つかっていない。

³³ 岸本萌里氏のご教示による。なお同氏のご教示により、宮内庁書陵部所蔵である野宮家史料「嘉永六年垂米利加使節来朝ニ付諸家建議 全」に海舟の上書が二種類記録されていることが判明した。しかし現在宮内庁書陵部からの使用許可を取得できていない。いずれ閲覧の予定ではあるが昨今の情勢を踏まえて、その存在について触れるに留める。

³⁴ 松浦『勝海舟』では、役人の人選は厳しくする、軍艦の費用は貿易で出す、江戸の防備は艦砲射

撃に注意する、西洋風の兵制に変える、火薬や武具の製造体制の確立については貧困御家人や旗本次三男及び厄介の内職にもなるようにする。この様に五箇条について論じる（六二～六三頁）。小池『幕末の武士道』では、特に交易で軍艦の費用をまかなうこと、人材を集めて討論考究させること、旗本を活用する兵制改革に重点を置いている（二四一～二四九頁）。金澤『幕府海軍の興亡』では、全体的な特徴は様式砲術への傾斜と和流砲術への批判、幕臣主体の近代軍制創設であるとし、最も重要となるのは、「海外交易による利潤」から「近代海軍の建設」という図式が明確に示されている点であるとする。また竹川竹斎の著作「護国論」と内容が類似していることを指摘している（五三～五四頁）。

³⁵ 講談社版『勝海舟全集』二、二五七～二六〇頁。

³⁶ 小池『幕末の武士道』二四四頁。

³⁷ 講談社版『勝海舟全集』一、二九六～二九七頁。なお、この件については勁草書房版『勝海舟全集』一の解説において松本三之介氏の言及がある。

³⁸ 江戸開城における海舟たち四人については、松浦『勝海舟』の他に、松岡英夫『大久保一翁 最後の幕臣』中央公論社、一九七四年。岩下哲典編著『高邁なる幕臣 高橋泥舟』教育評論社、二〇一二年。岩下哲典『江戸無血開城 本当の功労者は誰か？』吉川弘文館、二〇一八年がある。

³⁹ この詳細については、現在執筆中の別論考にて解説する予定である。

⁴⁰ 勝部真長『勝海舟』PHP研究所（使用したのは一九九二年刊の上下巻版。新装版として二〇〇九年刊行の上中下巻版もある）上巻八〇頁。

⁴¹ 金澤『幕府海軍の興亡』二四～二五及び二九頁。

⁴² 講談社版『勝海舟全集』二二、七一二～七一一三頁。

⁴³ 片桐『勝海舟の蘭学と海軍伝習』九頁。

⁴⁴ 先行研究として松浦『勝海舟』では、アメリカの強力な艦隊を軍事的にどう防ぐかという議論に終始しており、「当今の急務は人を選挙するに有り、而後、兵制革むべく、銃墩設く可し」、「英雄を選挙するにあり」と、「人と政治」重視の特徴が既に浮かび上がっていたとする（五八～五九頁）。片桐『勝海舟の蘭学と海軍伝習』では、「当今の急務は、英雄を選挙することである。兵制を改むことである。そのための、言路を開くべきである」とする（一二～一三頁）。金澤『幕府海軍の興亡』では、「古流砲術を批判し、兵制改革を求めたもの」とする（四九頁）。

⁴⁵ 岩下哲典『幕末日本の情報活動「開国」の情報史』雄山閣出版、二〇〇〇年。使用したのは二〇一八年雄山閣刊行の普及版、一〇二頁。なお同書の六九頁では、『海舟座談』で後年の海舟が「ペリー来航予告情報」について言及していることを指摘している。

⁴⁶ 三村晴山についての先行研究には、影山純夫「松代藩絵師三村晴山」『山口大学教育学部研究論叢 第一部 人文科学・社会科学』四四、一九九四年がある。

⁴⁷ 『史談会速記録』複製版、原書房、一九七一～一九七六年を使用した。

⁴⁸ なお、海舟と斉彬はペリー来航前から交流があったことから、『斉彬公史料』掲載の「勝麟太郎

「義邦上書」は、海舟から斉彬に直接伝わった可能性がある。しかし、『斉彬公史料』には明治期になってから海舟から薩摩側へ提供された史料が数種類収録されている。そのため、この際に上書も共に提供された可能性がある。

⁴⁹ 深井雅海、藤実久美子編『江戸幕府役職武鑑編年集成』一～三六、東洋書林、一九九六～一九九九年（以下、『武鑑』）。

⁵⁰ 『武鑑』の「天保武鑑」引用箇所は第二五卷三八六～三八七頁。「大成武鑑」引用箇所は第二五卷四七五～四七六頁。「安政武鑑」引用箇所は第三一卷三三三頁。

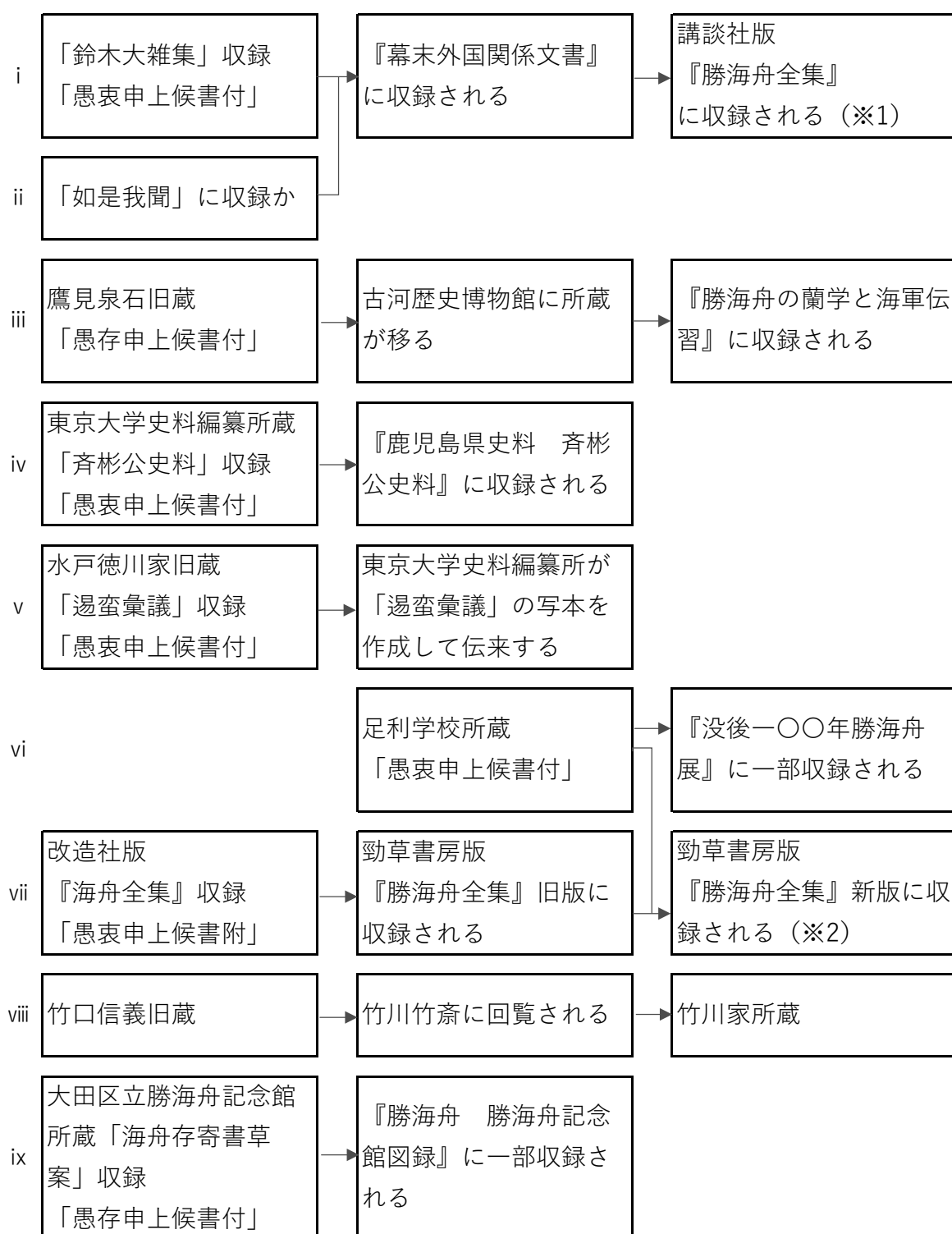
⁵¹ 鷹見泉石著、古河歴史博物館編『鷹見泉石日記』八、吉川弘文館、二〇〇四年、二九五～三一三頁。

⁵² 岩下哲典『原装影印本 金海奇観 解説 大槻磐溪編「金海奇観」と一九世紀の日本—「金海奇観」とその世界—』雄松堂書店、二〇一四年、二六頁。なおエレキテレーセテレグラフは、英語ではelectrical telegraph、オランダ語ではelectriciteit telegraafと書く。電信機は海舟の手紙ではイギリス・フランス間に敷設されていると記述してある。これについては、嘉永六年のオランダ別段風説書にも記されている（風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』、吉川弘文館、二〇一九年、四二四頁）。

⁵³ 前田育徳会編『加賀藩史料 藩末篇 上巻』広瀬豊作、一九五八年、六九六～六九八頁。

⁵⁴ 伊東多三郎「権力と茶坊主」、日本歴史学会編『日本歴史』三〇一、吉川弘文館、一九七三年。この論考によると、嘉永四（一八五一）年に井伊直弼と浦賀奉行の浅野長祚が神奈川で相駈となった時、宿割のため派遣された彦根藩井伊家家臣三人と神奈川宿役人との間で宿割について起きた紛争である「神奈川相駈一件」を、高橋とその息子高橋栄徳が解決している。高橋は道中奉行の深谷盛房に働きかけ、これが解決の糸口となって最終的には和解で決着がついた。なお、この件は『大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料』第二巻に関連史料が掲載されている。この三三六頁に、高橋は「元幕府表坊主」と記され、息子の栄徳が「幕府表坊主」と記されている。そのため、安政二年の「安政武鑑」にて、高橋を「表御坊主衆」とする記述が誤っている可能性がある。

表 勝海舟のペリー来航後上書 第一上書 系統図



※1 「如是我聞」の内容は、講談社版『勝海舟全集』には含まれていない

※2 足利学校所蔵「愚衷申上候書付」は、勁草書房版『勝海舟全集』が旧版から新版へ改訂される際に参考として使用された

Concerning the statement of opinion issued by the shogunate retainer Katsu Kaishū when Perry came to Japan

WADA, Tsutomu

Abstract:

Katsu Kaishū, a politician from the end of the Edo era and Meiji era, was promoted because of his statement of opinion when Perry came to Japan in 1853. There are three types of this statement of opinion. One was submitted to Tokugawa Nariaki in July 1853. I will call this the first statement of opinion. One is almost the same as the first statement of opinion. This is included in the "Bakumatsu kaikoku kankei monjyo" under the name of "Zonjiyorimoushiagesōrōkakitsuke". The other is the statement of opinion submitted again after the submission of the first statement of opinion. I will call this the second statement of opinion.

The first statement opinion contains several manuscripts and drafts. In this article, I will compare and examine the manuscripts of the first statement of opinion. Then, I consider what kind of system the manuscripts are divided into, and consider whether there is a definite difference in their contents. At the same time, I will consider the second statement of opinion and the historical materials and persons associated with it.

Manuscripts and drafts of the first statement of opinion confirm the existence of nine types. As a result of comparing these, it can be said that there is no definitive difference in the rough meaning of the sentence.

The second statement of opinion consists of five topics. The contents are summarized below. ① Appointment of human resources. ② Navy and trade. ③ Defense of cities, especially Edo. ④ Appointment of shogunate retainer. ⑤ Providing jobs to the shogunate retainer by manufacturing weapons and saltpeter.

Next, consider the second statement of opinion in comparison with the first. The summary of the first opinion is as follows. The three main points are military reform, selection of generals, and training of soldiers. On top of that, it is an urgent task to build a solid Daiba in Edo bay and take care of the direct retainer of a shogun to improve its handling. Also, warships are necessary, but it is difficult to use them immediately. It is not

too late even after the defenses of Edo have been solidified first. Regarding the relationship between the first and second opinions, there is a strong point that the detailed explanation of the former is carried out by dividing the latter into five topics. However, the big difference between them is that trade theory exists only in the second statement of opinion. The method of operating the navy and trade in conjunction with each other is considered to be derived from the later theory of coalition between Japan, Korea, and China.

Also, the first statement of opinion remained under Takami Senseki. In this case, it is possible that a person named Takahashi Eikaku is involved. Takahashi Eikaku may be the person who held the connection between Kaishū and Takami. Takahashi is also the person who tied Kaishū to Shimazu Nariakira who was the successor to the Satsuma domain. In addition, from the "Edo bakufu yakusyoku bukan Hen-nen syūsei", it is clear that Takahashi was the Omotebōzu. The Omotebōzu was a person who managed the parlor in Edo castle and served tea and bento to daimyo and other officials. Furthermore, from "Takami Senseki diary", it can be understood that Kaishū, Takahashi, and Takami were three common acquaintances. Omotebōzu was proficiently familiar with the things in Edo castle. From this standpoint, Takahashi is believed to have been involved in the relationship between Kaishū and Takami.

The results of this paper are as follows.

- Kaishū issued three types of opinions when Perry came to Japan. Among them, we compared and examined the manuscripts of the first statement of opinion. As a result, the existence of nine types was confirmed.

- The first statement opinion contains several manuscripts and drafts. In addition, a systematic diagram of each manuscript was created. As a result, the various manuscripts were not derived from a single original. Kaishū was writing some manuscripts. From these, it is considered that each further manuscript was made.

- I compared and examined the content of each manuscript of the first statement opinion. As a result, it can be said that there is no definitive difference in the meaning of the sentences.

- Strictly speaking, the first statement of opinion was submitted to Tokugawa Nariaki. Therefore, it is considered that the " Tekiban-igi " is the closest to the one submitted. However, the " Tekiban-igi " is preserved by the Mito domain as a manuscript, which is then copied and preserved by the Historiographical Institute. Perhaps because of that, there are parts that are thought to have been copied by mistake. Analysis by collation with other manuscripts is required.

- ・ Second statement of position. This can be said to be the guideline for Kaishū 's actions thereafter. It also became the defining factor in Kaishū 's life direction.

- ・ The first statement of opinion remained under Takami Senseki. It was Takahashi Eikaku who held the relationship between Takami and Kaishū. Takahashi is the Omotebōzu of the Shogunate. It is considered that the existence like Takahashi played an important role in making connections.